

復活節第6主日礼拝説教「救しに向かう祈り」予稿

石神井教会 2017年5月21日

【使徒書日課】ヘブライ人への手紙 7章11～25節

¹¹ところで、もし、レビの系統の祭司制度によって、人が完全な状態に達することができたとすれば、——というのは、民はその祭司制度に基づいて律法を与えられているのですから——いったいどうして、アロンと同じような祭司ではなく、メルキゼデクと同じような別の祭司が立てられる必要があるでしょう。¹²祭司制度に変更があれば、律法にも必ず変更があるはずで、¹³このように言われている方は、だれも祭壇の奉仕に携わったことのない他の部族に属しておられます。¹⁴というのは、わたしたちの主がユダ族出身であることは明らかですが、この部族についてはモーセは、祭司に関することを何一つ述べていないからです。¹⁵このことは、メルキゼデクと同じような別の祭司が立てられたことによって、ますます明らかです。¹⁶この祭司は、肉の掟の律法によらず、朽ちることのない命の力によって立てられたのです。¹⁷なぜなら、

「あなたこそ永遠に、メルキゼデクと同じような祭司である」と証しされているからです。¹⁸その結果、一方では、以前の掟が、その弱く無益なために廃止されました。——¹⁹律法が何一つ完全なものにできなかったからです——しかし、他方では、もっと優れた希望がもたらされました。わたしたちは、この希望によって神に近づくのです。

²⁰また、これは誓いによらないで行われたものではありません。レビの系統の祭司たちは、誓いによらないで祭司になっているのですが、²¹この方は、誓いによって祭司となられたのです。神はこの方に対してこう言われました。

「主はこう誓われ、その御心を変えられることはない。『あなたこそ、永遠に祭司である。』」
²²このようにして、イエスはいつそう優れた契約の保証となられたのです。²³また、レビの系統の祭司たちの場合には、死というものがあるので、務めをいつまでも続けることができず、多くの人たちが祭司に任命されました。²⁴しかし、イエスは永遠に生きていますので、変わることのない祭司職を持っておられるのです。²⁵それでまた、この方は常に生きていて、人々のために執り成しておられるので、御自分を通して神に近づく人々を、完全に救うことができになります。

【福音書日課】マタイによる福音書 6章1～15節

¹「見てもらおうとして、人の前で善行をしないように注意なさい。さもないと、あなたがたの天の父のもとで報いをいただけないことになる。

²だから、あなたは施しをするときには、偽善者たちが人からほめられようと会堂や街角でするように、自分の前でラッパを吹き鳴らしてはならない。はっきりあなたがたに言うておく。彼らは既に報いを受けている。³施しをするときは、右の手のすることを左の手に知らせてはならない。⁴あなたの施しを人目につかせないためである。そうすれば、隠れたことを見ておられる父が、あなたに報いてくださる。」

⁵「祈るときにも、あなたがたは偽善者のようであってはならない。偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる。はっきり言うておく。彼らは既に報いを受けている。⁶だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる。⁷また、あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多ければ、聞き入れられると思ひ込んでいる。⁸彼らのまねをしてはならない。あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。⁹だから、こう祈りなさい。

『天におられるわたしたちの父よ、御名が崇められますように。』

¹⁰御国が来ますように。

御心が行われますように、天におけるように地の上にも。

¹¹わたしたちに必要な糧を今日与えてください。

¹²わたしたちの負い目を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。

¹³わたしたちを誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください。』

¹⁴もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたの過ちをお赦しになる。¹⁵しかし、もし人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しにならない。」

祈るときには…

主イエス・キリストのご復活を祝ったイースターから「復活節」の期節も6週目を迎え、今週の木曜日には大きな節目の記念日「昇天日」を迎えます。わたしたちの教団の正式な教会暦の一つとして定められている記念日ですが、その日を憶えて礼拝や特別な祈りのときを持つ教会は、ほとんどないかもしれません。十字架で死なれて墓に葬られて三日目にご復活なされた主イエスが、弟子たちの間に現れて40日間を共に過ごして下さった後に、天に昇られたことを記念する日です。わたしたちも他の教会と同様、「昇天日」当日には何もいたしません、次主日の礼拝では、定められた聖書日課に従って主の昇天の出来事を記念いたします。その前の主日である今日は、古い伝統では「祈りの主日」と呼ばれてきたそうです。主イエスが祈られた祈り、また弟子たちにお教えくださった祈りを、主が地上に生きる弟子たちに残して下さったことの最終的なものとして、心に留めなおすようにと、守られてきたことなのであります。

今日の福音書は、主イエスが「山上の説教」(マタイ5~7章)の中で「祈り」についてお教えくださったところです。もっとも、聖書日課として朗読されたのは、「祈り」についての教えの前の部分、「施し」についてお教えくださっているところからでした。なぜそのようなまとまりで日課箇所となっているのか不思議に思われるかもしれませんが、もともと、この「施し」についての教えと「祈り」についての教えに加えて、続く「断食」についての教えまでが、ひとまとまりの教えであったようです。そのひとまとまりの教えの最初に、主イエスはまず、「**見てもらおうとして、人の前で善行をしないように注意しなさい**」と言われました。「善行」と訳されているのは、他の箇所では「関係の正しさ」を表す意味で「義」と訳されている語ですが、施し、祈り、断食の実践についてまとめて「義」の問題だとお教えになられているのです。そして、その「義」はいずれも、人前でどう見られるかということとしてではなく、ただ「**隠れていることを見ておられる父**」の目に照らして行われるべきだとお教えなのです。そのようなものの一つとして、「祈り」についても、主イエスはお教えになられているわけです。

多くの皆さんは、主イエスがここで「祈り」についてお教えになられていることを、すでによくご存じだと思います。これまでに何度も、礼拝の説教や聖書研究で、あるいは書物で、この箇所について学んでこられたのではないのでしょうか。端的に、主イエスはここで、まず、わたしたち一人ひとりの祈りのこととして「**密室の祈り**」をお教えになられ(5節)、そして続いて、わたしたちの祈るべき祈りの言葉として「**主の祈り**」をお教えくださっている(9節以下)、ということ、わたしが触れる前からすでに読み取られている方も少なくないでしょう。

あらためて確かめる必要もないかもしれません。ここで主イエスが「だから、こう祈りなさい」とお教えくださった祈りの言葉を、教会は「主の祈り」と呼んで、受け継いできたのです。実際に礼拝などで用いる「主の祈り」の言葉は、概ね同じものとしてルカ福音書(11章)が伝えているものと合わせて整えられてきたものです。それを、わたしたちは、この礼拝でも、この後、共に唱えます。

祈りの言葉

おそらく、「主の祈り」は、わたしたちが教会で最初に習い、憶える祈りの言葉の一つでしょう。短い祈りの言葉ですから、幼児でも耳から聞いて覚えて唱えるようになります。もしかすると、皆さんの中にも、机に向かって「主の祈り」の言葉の書かれたものを開いて、一所懸命に暗記した、というのではなく、礼拝に出席して、周りの人が唱えているのを聞いているうちに、いつのまにか覚えたという方がいらっしゃるのではないのでしょうか。わたし自身、親や兄姉に連れられて教会に通うようになった幼いときに、礼拝で唱えられている言葉を聞いて、いつのまにか覚えて自分でも唱えるようになったと記憶しています。ただ、ただでさえ文語体の言葉ですから、大人になるまで誤解したままだったところもありました。そうだとすると、言葉として覚えるのが難しいものではありません。

皆さんは、「主の祈り」に限らず、祈りの言葉をどのように身につけられたのでしょうか。「言葉」というものは、そもそも、教えられなければ口にすることができるようになりません。「祈りの言葉」も、わたしたちの心の中から自然に湧き出てくるものではないでしょう。願いにしろ、感謝にしろ、どこかで与えられた言葉を用いて、わたしたちは、自分の「祈りの言葉」を整えているのです。逆に言えば、わたしたちが祈る祈りは、これまでに与えられ、学んだ「祈りの言葉」によって決まる、と言ってもよいのです。

幸いに、現代人のわたしたちは、その気になれば、たくさんの「祈りの本」を手にすることができます。祈りについて教える本もありますが、先達の祈ってきた祈りそのものを教える本があります。そのような祈りの本を用いて祈りの言葉を学ぶことができます。けれども、たとえそのような祈りの本を用いることがなくても、手に入れることができなくても、わたしたちは、祈りの言葉を学ぶことができます。聖書があるからです。聖書には、たくさんの信仰の先達の祈りが伝えられています。主イエスも、ユダヤ人の習慣、なかでも安息日の会堂で行われていた礼拝で用いられていた祈りの言葉を学ばれていたでしょうけれども、それだけでなく、旧約聖書の伝える祈りの言葉を直接学ばれていたようです。ことに多くの詩編の言葉は、そのまま暗誦できるほどに憶えていらしたようです。わたしたちが教会の礼拝で多くの詩編の言葉を用いるのも、そのような主イエスが為されていらした祈りの言葉を学ぶ営みを受け継いでいるからです。

弟子たちも、そのような学びの営みを、主イエスと共にしていたのに違いありません。けれども、弟子たちは、なかなか、主イエスがお考えになられていらしたようには祈ることができるようにならなかったのかもしれませんが。確かに、祈りの言葉は、ただ知識として学べば使いこなせるようになる、というものではありません。むしろ、わたしたちは、祈りの実践そのものの中に置かれることによって、祈りの言葉を身に着けていくということかもしれません。自分の代わりに祈ってくれている人の祈り、自分のことをも覚えて祈ってくれている人の祈り、そのような人の祈りの言葉の中に置かれてこそ、わたしたちは、自分自身の祈りの言葉として身に着けることができるのではないのでしょうか。

天におられるわたしたちの父よ…

「主の祈り」の言葉を、弟子たちは、おそらく、幾度も繰り返し、主イエスから教えられたのだと思います。ルカ福音書(11章)では、弟子たち自身が「わたしたちにも祈りを教えてください」と願って教えてもらったと伝えられています。実際には、主イエスは、憶えの悪い弟子のために幾度でも「主の祈り」を口伝のお教えになられたのではないのでしょうか。だからこそ、少しずつ違った言葉で伝えられたものがあるのでしょうか。

主イエスが直々にお教えくださった祈りの言葉です。わたしたちであれば、すぐに、忘れないようにメモを取っておくことでしょう。けれども、弟子たちは、主イエスが目の前にいて教えを語られたときに、その教えをメモしたり、ノートを取ったりということは、しませんでした。文字を書くことのできる者もいましたが、ただ耳を傾けて聞いたのです。主イエスがお語りくださった、たくさんの教えや、祈ってくださった、たくさんの祈りの言葉を、弟子たちは、もしかすると随分、聞き逃したり、忘れてしまったりしたかもしれません。そのような中で、それでも弟子たちが忘れることなく、記憶に残った、主イエスの教えの言葉、祈りの言葉が、福音書にまとめられて、わたしたちにも受け継がれました。

そのようなものとして主イエスの教えや祈りの言葉を読み直すとき、わたしは、弟子たちが、その言葉を、どのような思いで心に留めることになったのかと、想像するのです。ことに、「主の祈り」を、弟子たちは、どのような思いの中で、心に留め、記憶し、自分たちの祈るべき祈りの言葉として受け継ぐことになったのかと、思い巡らさないではいられないのです。

わたしは、弟子たちにとって「主の祈り」は、ただ「祈りのお手本」と言うだけのことではなかったと思います。「主の祈り」は、もちろん「祈りのお手本」としても教えられたのでしょうけれども、何よりも、まず主イエスがいつも弟子たちの傍らで祈ってくださっていた祈りだったのではないのでしょうか。それも、主イエスが、弟子たちのために、弟子たちを天の御父にとりなすために、祈ってくださっていた祈りとして、弟子たちは耳にしていたのではないのでしょうか。

先主日の礼拝で「母の日」をおぼえて讃美歌 510 番を歌いましたが、自分のために祈ってくれている人の祈りが、いつしか自分の祈りになっている、ということをお話くださった方がありました。主イエスが、弟子たちのために、わたしたちのために、「主の祈り」を祈って、天の御父へととりなしてくださっているのです。その祈りの中へと、主イエスは、弟子たちを、わたしたちを、招き入れてくださったのです。それは、何よりも、わたしたちが御父に赦されているように、互いに赦し合う者として生きるようになるため、赦しの祈りに生きるようになるためだと、マタイ福音書は、わたしたちに伝えているのです。

「わたしたちの負い目を赦してください。わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように」。主イエスが赦しの祈りをお始めくださいました。御父にわたしたちをとりなしてくださっているのです。わたしたちが赦された者として赦しの祈りに生き始めることができるように。だから、わたしたちも祈るのです。